

見る

福智に残るやきものの新たな流れをひきつぐ。

福智に残る文化

福智山麓一帯は良質な陶土の里として古くから知られ、周辺の上野焼以外にも、独自の手法で陶器の新たな流れを生み、現在に残り続けている文化があります。



buzenkichimongama 別冊マップ E-2

〒822-1212 福智町弁城856番地2
TEL 0947-22-5455
FAX 0947-22-2214
HP <http://kichimongama.com>
mail kichimongama@ybb.ne.jp

豊
前
吉
右
衛
門
窯



fukuchiyakiwagagama 別冊マップ E-3

〒822-1211 福智町伊方2115番地1
TEL・FAX 0947-22-0567
陶芸教室 要予約

福
智
焼
我
窯



kazinyo 別冊マップ B-3

〒822-1202 福智町金田1562番地
TEL 0947-22-1046

圭
人
窯



kougama 別冊マップ D-2

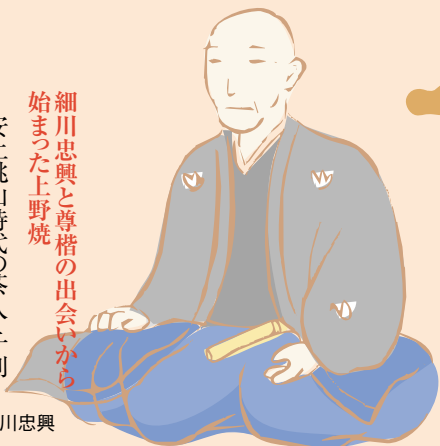
〒822-1102 福智町上野933番地1
TEL 0947-28-4338

耕
窯

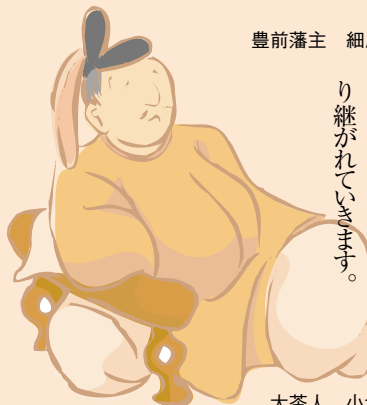


安土桃山時代の茶人・千利休の指導により、「茶禅一味」の奥義を極めた豊前藩主・細川忠興が慶長7年(1602)に朝鮮の陶工・尊楷を招き、陶土に恵まれた上野の地(釜の口窯で窯を築いたのが始まりだとされています。尊楷は地名にちなんで上野喜蔵高国と改名し、三斎(細川

細川忠興と尊楷の出会いから始まった上野焼



豊前藩主 細川忠興



大茶人 小堀遠州

忠興の号)好みの茶陶を創り献上し続けました。その後、尊楷は藩主の移封(国替え)に従って、寛永9年(1632)肥後熊本(八代へ移りましたが二男の十時孫左衛門と娘婿の渡久左衛門が上野に残り、新藩主となった小笠原家のもと、皿山本窯で上野焼を造り続けました。藩窯として栄えた上野焼は幕末まで守り継がれていきます。



江戸時代後期の上野焼

多くの茶人が愛用 徳川時代になると、上野焼は徳川家茶道指南役の大茶人・小堀遠州が指導した国焼で遠州好みの茶陶、遠州ゆかりの七窯のひとつとして選ばれています。戦乱の世から間もない上野焼初期には野趣あふれる大胆な作風が見られ、江戸初期には、一般的に知られる銅を含んだ緑青釉をはじめ、紫蘇手、上野三彩などが創られ作品を特徴づけました。明治時代になると廃藩置県によって豊前小倉藩がなくなると後、上野焼は二期途絶えたかのように思われましたが、明治35年(1902)、田川郡の補助を受け、熊谷九八郎によって再興されました。



熊本県八代にある尊楷の墓(イメージ)

さらに長男の熊谷竜三郎がその後を受け継ぎ、さらに技に磨きをかけて現在に至る土台を築き上げました。昭和58年には国(通産大臣)の伝統的工芸品の指定を受け、現在24の窯元が点在し、長い伝統から生まれた多彩な技法によって趣を変え、格調高い洗練された形を残しながら現在に至っています。



福智窯の

足あと

細川忠興と尊楷の出会いにより上野焼400年の歴史が始まる。数々の先人たちの労を経て、現在まで燃え続ける上野焼の炎。この土地に古くから残る窯の面影を追って上野焼の伝統と歴史を体感する。



いたるところに点在する上野焼

釜の口窯跡

上野焼発祥の窯で細川忠興が李朝陶工尊楷を招致して最初に築いた窯です。上記写真は昭和30年、上野焼組合、田川郷土研究会と日本陶磁協会が発掘したときの写真ですが現在は竹藪となっています。

別冊マップ D-1